

第4章 総括

4.1 談話の研究のまとめと臨床的意義

第2章では、始めに失語症者群に日常の談話の一つであるラジオニュースを無修正で聴かせ、その理解を検討した。その結果、失語症者は単独文よりも、ニュースをよく理解した。特に軽度非流暢群は良好で、年代の一致する健常者と有意差がなかった。以上より、失語症者は日常のニュースをよく理解して聴取していると推察した。しかし、日常では、何題ものニュースを連続して聞いている。

そこで、軽度失語症者群、健常者年代一致群、健常者若年群にラジオニュースを4つ連続して聞かせ、単独のラジオニュースを聞いた場合と比較した。失語症者の半数は単独ニュースをよく理解した。しかし、4つのニュースを連続して聞かせると成績が顕著に低下した。健常者年代一致群は4つの連続したニュースで、最後のニュースが不良であった。失語群もこの傾向があった。

そこで、ワーキングメモリーの理解容量と把持容量の観点からモデルを作り分析した。健常者年代一致群と健常者若年群の理解容量は、連続ニュースの聴取においても保たれていた。しかし、健常者年代一致群では、連続するニュースの最初のニュースの把持容量は保たれていたが、続く3つのニュースのための把持容量は漸次減少していった。失語良好群の理解容量は、単独ニュースを処理するには十分であるが、連続条件を遂行するにはきわめて不十分であった。また、連続してニュースを聴取すると、それらの把持容量も大きく減少していた。従って、失語症者の談話の理解は保たれているとした今までの研究は、失語症者の談話の

処理能力の一部しか評価していなかったことが判明した。

日常では、テレビや映画、講演などで数時間に及ぶ談話や対話を聞くことも多い。そこで、2種類の体験談話、一人の話者による6分談話と30分談話の理解実験を行った。その結果、失語症者は単独ニュースと同様の成績を収めた。6分談話から30分談話への理解の低下率もほとんどなかった。健常者2群は30分談話の「最後」が良好な傾向があったが、失語群ではその傾向は見られなかった。

以上の3つの成績を比較したところ、失語群では、特に連続ニュースの処理に障害を見せた。以上から、筆者は失語症者にとって、単位時間内の情報密度が高くなければ、時間の長さによる影響はすくなく、把持容量の減衰も少ないと結論した。以上のように第2章を概観した。

本論文では、談話を連続聴取した場合のモデルを提案した。しかし、失語学では勿論、認知心理学でもこのモデルや仮説の裏づけとなるような研究はいまだ乏しい。そのため、考察や分析がやや狭く、浅いものにならざるを得なかった。また、含まれる情報量を測る尺度も現在まで、見出せなかった。今後それらの情報尺度が得られれば、失語症者や健常者の談話の理解と把持の程度が、よりよく推測できるものと思われる。

失語症者の理解力の障害は、日常ほとんど気づかれないレベルから、自分の名前を呼ばれてもそれが自分の名前とわからないレベルなどのように幅が広い。特に談話の理解の障害は他覚的にきずかれにくい。また、発話や書字と異なり、その障害が他人や本人自身にも気がつきにくいことを特長とする。適切な評価方法の開発が必要とされる。

談話は、失語症者の総合的な理解力を知る優れた素材である。今後、失語症者のCommunication ADLの解明や訓練方法を考えるうえでも談話の研究は重要であろう。日常の各種の談話を失語症者がどの程度理解し

ているかが推測できるとともに、必要とされる支援の内容もおのずから明らかになるであろう。

日常場面では情報の伝達が聴者と話者との相互交渉、すなわち対話形式で行われることも多い。対話場面に効果的に参加できる失語症者は限られるが対話という、より動的な場面における失語症者の行動把握も今後の検討課題である。失語症者の日常に目を向けた視点からは、談話の連続のような新しいパラダイムが開ける可能性もあろう。

ところで、談話の理解は記銘力障害などの記憶障害者でも著明に低下する。この群は失語症と異なり、短文の理解にはまったく障害を示さない。しかし、談話を聞いたあとでは、その内容の多くを忘れる。この点では、失語症者とは逆の傾向をもつが、記憶障害者の談話の理解は失語症者以上に検討されていない。談話の理解をより詳細に研究することで、失語症者のみでなく記憶障害者の評価や支援の方法にも発展が期待できよう。安田(2001)は談話のサマリーの自動化など工学的な支援法を提唱している。

健常者においても例えば、学会などでは談話の連続を10時間にもわたって聞いている。我々自身、このような長時間にわたる聴取から、それらをどの程度「理解」「把持」できているのであろうか？現在の社会ではほとんどの情報が談話の中で伝達されることを考えれば、このような研究が無かったのもきわめて不自然であった。効率的な情報伝達のための談話の組み立て法を考える際にも、談話の理解の検討は重要である。今後、談話に含まれる情報量と長さを考慮にいれつつ、より多くの被検者に対して各種の談話を素材に用いた検討が望まれる。